



Title	「海」を通じた共生の姿：言語、文化、世代を超えた教室外の学びの場
Author(s)	林, 貴哉
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 430-432
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「海」を通した共生の姿

言語、文化、世代を超えた教室外の学びの場

林 貴哉

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

ベトナムの南中部の都市クイニョン (Quy Nhon) には、有志によって行われている図書館活動がある。クイニョンは海に面した小さな都市であり、ビーチは海水浴をする旅行者だけでなく、様々なスポーツをする地元の老若男女であふれている。日曜の午後になるとビーチに現れる本棚の周りには、熱心に本を読む子どもや親同士で談話する男性、大学生や大人たちとの会話を楽しむ子ども、楽しそうに英語で話をする人の姿も見られる。それは20代から30代の大学生や社会人を中心に英会話クラブとして始まったクイニョン・キッズ・クラブが、毎週、設置しているものだ。ベトナム語の習得のために2015年10月から2016年8月まで、クイニョンに留学していた私もその活動に参加していた。

クラブの参加対象者は「英語がとても好きで英語力を向上させたいと思うベトナム人」、「クイニョンについて理解を深めたい、現地の友達を作りたいと思う外国人」とされている。外国人旅行者や滞在者に対してクイニョンの街、人、文化を英語で紹介することを通じて、ベトナム人の英語力を高めるとともに、外国人にクイニョンに関する理解を深める機会を提供することが目的のようだ。私はベトナムでのホームステイファミリーの友人がこのクラブのメンバーであったため、週末になるとクラブのメンバーと一緒に街の名物を食べに行ったり、ハイキングに行ったりするようになり、いつの間にか留学先での友人が増えていった。

クイニョンには様々な目的で滞在する外国人がおり、その中には街を離れる前にクイニョンの海岸でゴミ拾い活動を行った人もいた。美しい自然があるにもかかわらず、そこにごみのポイ捨てがあることを残念に思ったからだ。これに参加したクイニョン・キッズ・クラブのリーダーであるブウ (Vũ) さんは、きれいな海を守っていくためには、住民、特に子どもたちの意識から変えていく必要があると感じたという。そして、海を愛する気持ちが子どもたちに芽生えれば、子どもたちは海を保護する方法を見つけることができるだろうと考え、環境問題や海の生物に関する知識を身につけるための図書館を始めようと思い立った。最終的に「自然科学」「動物」「環境」「昔話」に関連する子ども向けの本が寄付で集められ、ハイ・ミンというクイニョン市内から船で15分程のところにある漁師町の寺院と、クー・ラオ・サイン島という離島の寺院の2か所に常設の本棚が置かれ、クイニョン市内の海岸でも移動図書館活動が行われることとなった。ハイ・ミンの寺院においては本棚を設置するだけでなく、毎週日曜日には子どもたちを対象に、グループ活動や英語学習を中心とした学習会もメンバーによって継続的に開かれている。寺院は様々な人に開かれた場所であり、ギターができるアメリカの方が、英語の歌を子どもたちに教えるということもあった。私自身も2016年2月の図書館設立の際から8月にクイニョンを離れるまで、何度かハイ・ミンの寺院での活動に参加させてもらった。

活動に参加する中で、私自身にも変化があったように思う。はじめは、クイニョンについて理解を深めたい、友だちを作りたいと思う「外国人」の一人であったが、ひと通り街の様子が分かってくると、他の外国人観光客に対して私も英語で街の名物や歴史を紹介できるようになった。メンバーから「あなたはもう Quynhonese ですね」と「クイニョン人」を意味する英語の造語で呼ばれることもあった。ベトナム語でクイニョン人 (Người Quy Nhon) と呼ばれるのではなく、英語の造語で呼ばれている点が「日本人 (外国人) でありながら、地元クイニョンのことをよく知っているが、ベトナムに同化しているわけで



写真1. クイニョンのビーチで読書をする子どもたち

もない」という自分らしさを表しているようで心地よく感じた。また、最終的には私も子どもに日本語を教えることができたり、自分が好きな日本語の絵本にベトナム語の訳を付けて図書館に寄付することができたりと、自分なりの方法で地元の子どもたちと関わることもできた。図書館活動はとて居心地の良い場所になっていた。

ところでクイニョン・キッズ・クラブというクラブ名ではあるが、実際には「キッズ（子ども）」だけのものではない。リーダーのブウさんによると、そこには「大人が子どもになれる場所」という意味が込められているそうだ。普段の仕事においては、ある人との関係がもたらす利益に注目して関係づくりをしなければならないことが多いが、週末の異文化交流の際は、損得勘定のために「あなたは何者なのか？」を他人に問う必要のない場所、子どもに帰ることができる場所を作りたいと考えているという。

「海」という地元の人々にとっては重要な場所において、「海」を守るという目的のもと、図書館活動は始まった。そこに参加した人が誰であったとしても、それぞれのメンバーが自分のできることを他のメンバーとともに発揮している。このように一人ひとりが街の良さを共有し、守る活動をしていくことで、言語、文化、世代を超えた人と人とのつながりが広がり、クラブの活動は進化している。あくまで個々人が自分らしく楽しむことを重視しながら、学びの場を提供しあう、肩ひじ張らない共生の姿を見たように感じた。